

Work: A Story of Experience における「作家業」の不在が意味するもの

The significance of the absence of the writing in *Work: A Story of Experience*

杉山 眞弓¹

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科

Mayumi Sugiyama¹

¹Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：仕事，作家業，苦役

Key words : Work, Writing, Labor

抄録

ルイザ・メイ・オルコットは児童文学作家，家庭小説作家として知られているが，成人を対象とした，社会問題について考察した作品もある。そうした社会的な問題を扱った作品のひとつである，*Work: A Story of Experience* (1873) はオルコット自身の様々な仕事経験を通じて，仕事の価値を描いている。しかしながら，オルコットにとって主たる職業で，生計手段であったはずの仕事である「作家業」は *Work: A Story of Experience* において取り上げられていない。本研究はオルコットにとって「作家」という仕事が複雑な性質を持っていたことに焦点を当て，*Work: A Story of Experience* における「作家業」の不在の意味を分析するものである。この小説が人間にとって理想的な仕事像を描いたものであるにもかかわらず，作家という仕事はその複雑さゆえに理想の仕事として位置づけられなかったことを述べる。

Little Women (1868) に代表される Louisa May Alcott (1832-1888) は，文学史において少女小説作家，家庭小説作家という位置づけがされている。しかし，Alcott には *Behind a Mask* (1866) をはじめとする，匿名で執筆した，成人向けの扇情的な小説やスリラー小説も多い。また，実名で発表した大人向けの小説として，彼女が自身の経験をもとにして書き上げた作品，*Work: A Story of Experience* (1873; 以下 *Work*) もある。*Work* は働くことを取り上げた小説であるが，*Little Women* などの少女小説ほどは批評の対象になっておらず，評価も高くなかった。

しかし，近年になって，Alcott の小説が女性の自立を描いたものであるという評価もされるようになった。たとえば Carolyn Maibor は，Alcott が labor の長所を語り，仕事の問題を通じて女性の自立などについて述べていると言い，“The text most concerned with these issues is Alcott's female Bildungsroman, *Work: A Story of Experience*, in which she shows the development of a female protagonist

through a variety of job experience” (xxiii-iv) と，*Work* が女性にとっての仕事の重要性を主張した作品であると述べている。このように，Alcott の作品群を読み解くうえで本作品への注目度が高まっている。

Work はその題名のとおり，主人公である Christie を通じて，仕事によって女性が自立することの意義や困難を描いているが，作家という仕事は取り上げられていない。*A Story of Experience* という副題が添えられているように，本作品は Christie が経験する様々な職業について語っているが，女中や女優といった，それらの職業の大半は Alcott 自身が従事したもので，まさしく彼女の「経験」が反映されている。しかし，Alcott にとって何よりも経験値が高く主たる職業であり，生計手段であったはずの仕事である「作家業」は不在なのである。

本論では，「作家業」が不在である理由を，*Work* は Alcott が理想とした仕事，すなわち自分という存在が“useful, happy woman” (*Work* 11)だと意識で

きる仕事へとたどり着く過程を描いた作品であるにもかかわらず、作家は理想的な面と同時に、それとは相反する性質も備えていたため、仕事における位置づけが困難であるからだという点を論証したい。

Work の第 1 章から 8 章までは、5 つの職業を渡り歩く Christie の経験が描かれている。父母に捨てられて叔父と叔母と暮らしていた Christie は 21 歳の誕生日を迎える前日、唐突に自立を宣言して都会へ出る。手に職もない Christie は不本意ながらも女中からキャリアを開始し、女優、家庭教師、話し相手、お針子と仕事を替えていく。縫製の工房では Rachel というお針子と親しくなるが、Rachel は墮落した過去があったことが発覚し、彼女をかばった Christie は仕事を辞める。その後は仕立物の内職をしていた Christie だが、やがて困窮し、ついには自殺しようとする。

第 9 章から最後の 20 章までは、より内面的な人生の旅へ向かう Christie が描かれている。洗濯屋を営む Wilkins 夫人の家で回復した Christie は、超絶主義者の Power 牧師や精神的な生活を重視する David と出会う。Christie が従事する仕事は Wilkins 家での家事手伝い、Sterling 夫人の話し相手兼家事手伝いである。やがて Christie は Sterling 夫人の息子の David と結婚するが、結婚生活は非常に短いものとなる。南北戦争に出征した夫のそばにいたために Christie は従軍看護婦となったが、彼は戦死する。Christie は David の娘を産み、彼の遺志を継いで園芸業でつましく暮らした。そして 40 歳の時に女性労働者の集会に出かけた Christie は、中産階級と労働者階級の女性たちをつなぐ媒介的な役割に天職を見出す。

このように、*Work* は第 8 章までの前半と、第 9 章から最終章までの後半のふたつに分けて考えることができる。Christie の 5 種類の仕事遍歴が描かれた前半では、彼女にとっての「自立」が経済的に独力でやっていけることを指しており、働くという行為には経済的必要性が大きな比重を占めていた。Christie は仕事をすることによって人生勉強をしないわけではないが、それ以上に彼女にとっての「仕事」は、対価と交換するものという目的が大きい。しかし、後半では「自立」が精神的な意味を帯びるようになり、仕事における金銭面の重要性が次第に失われていく。経済面での重要性よりも、内面の充足感の重要性に焦点が当てられ

るようになっていくのである。

「仕事」という意味を表す言葉として、*Work* では主に *work* と *labor* が用いられているが、*work* は作品全体を通じて、一般的な意味での「働くこと、活動」という意味で使われているのに対して、*labor* の使われ方には作品の前半と後半とで違いが見られる。*work* の意味は OED によれば、「何かを成すこと、活動や行為」とされ、特にマイナスイメージはない。それに対して *labor* は、OED によれば、「苦痛や義務を伴う肉体や精神の骨の折れる作業、労苦」と、苦役のイメージを伴っている。Alcott は *Work* において、言葉の辞書的な意味では *work* と *labor* を明確に区別して用いてはいない。しかし、概念としては、おおまかに *work* と見なされる仕事と *labor* と見なされる仕事とに分けている。Alcott にとっての *work* とは、生きがいややりがいを感じ、経済的にも精神的にも自立しているという意識を持つことができ、幸福感を味わうための手段であった。それに対して *labor* は、*Work* の前半においては否定的なもの、辞書的な意味どおりの苦役として描かれていたが、後半では性質に変化が現れ、*work* に近いものとなっていることが読み取れる。前半における *labor* は報酬を得ることのみを目的とした「単純作業」や体を使うだけの「骨の折れる作業」の意味で用いられていた。しかし後半では、*labor* が単に忌むべきもの、*work* よりも劣るものではなくっており、肯定的な性質さえ帯びてくる。なぜなら、好ましい活動とは言えない *labor* ですらも、“useful, happy woman” (*Work* 11) になるという Christie の目標を達成するための手段としては重要なものだと考えられるようになってくるからである。

Christie が自立を目指してひたすら職を求めていた前半部分は新しい女性像が描かれようとしていたのに、後半になると、*Work* は従来の典型的な家庭小説、感傷小説に戻ったかのようなという批判がある。Jean Yellin は“the second half of *Work* lacks vitality” (533) と、前半部分よりも物語に勢いがなくなったことを指摘し、“the writing becomes muddled and vague” (533) と批判している。また、Elaine Showalter はこの小説が“the novel represents a bold new kind of genre which criticizes the ideology of romantic love in the interests of female sexuality and community” (*Alternative* xxxiii) と新しいジャンルを切り開くかのように見えていたのに、Christie が

Wilkins 夫人の家で生きる力を取り戻していく様子を描いた後半部分の始まりを指して“Christie seems to regress into pre-Oedipal domesticity and sentimentality, as if into another kind of novel”

(*Alternative xxxiii*) と、作品の前半と後半の乖離を指摘している。このように、Christie が恋愛して結婚し、出産するという人生での出来事を描いた小説の後半については、従来の感傷小説や家庭小説と変わらないという批判がある。

しかし、*Work* は理想の仕事を求める過程を描いた作品であり、その理想像が現れるのは作品の後半においてである。前半は単に Christie の仕事経験が描かれているにすぎないが、後半は仕事における精神的な自立の意識、生きがいやりがい、さらには幸福感といったものに焦点が当てられている。Christie が追い求めた目標、“I only ask for a chance to be a useful, happy woman” (*Work* 11) が達成されるのは後半の仕事によってである。後半にこそ Alcott が仕事に求めていたもの、彼女にとっての仕事の価値という内面的なものが描かれている。

後半での「仕事」は満足感や充実感が前半の「仕事」よりも高く、報酬を得ることは Christie にとって優先順位の上位に来ておらず、働いているときの心理状態が重視されている。同じ家事労働であっても、前半で女中として携わったものとは異なり、後半の Sterling 夫人の家での家事労働には、Christie が心の平穏や充足感、さらには自己実現と呼べる感情を抱いていることが読み取れる。従軍看護婦時代の Christie は戦地で活躍し、仕事に充実感を覚えている。そして最終的には、女性の社会的な地位向上のために尽力する活動に生きがいを見出すのである。*Work* の後半における仕事は、前半における仕事と明らかに異なっている。後半部分が前半部分よりも重要であると言っているだろう。

Alcott にとって「作家業」という仕事は、*Work* の後半で描かれたような理想的な work であるべき存在なのだが、*Work* には作家がまったく現れない。なぜならば、Alcott にとって「作家業」は、自己実現を可能にする理想的な work であると同時に、理想とは逆の方向へ進む要素も伴う work でもあったからである。すなわち、後半で肯定的な意味合いを帯びようになる labor ではなく、生計を立てる手段として金銭的な価値を求めるだけの、本来の labor としての面を備えるものでもあった。

作家業は、作品を生み出すという創造活動から得られる充実感や精神的な喜びがあるはずなのに、苦役や苦悩といった否定的な面も伴っている。このように作家業には「仕事」のプラス面とマイナス面の二面性が存在し、単純に良し悪しの評価がつけられないがゆえに、作家という仕事は *Work* のどこにも位置づけられず、不在となったのである。

1. *Work* において仕事はどのようにとらえられているか

Work という小説は、主人公 Christie が目指した“useful, happy woman” (*Work* 11) になるという目標が、理想の仕事に携わることによって達成されるまでの過程が描かれた作品である。この作品は Christie が 21 歳の誕生日を迎える前日に、“Aunt Betsey, there’s going to be a new Declaration of Independence” (*Work* 5) と唐突に決意を述べる場面から始まる。Christie のこの「独立宣言」が、セネカ・フォールズでの Elizabeth Cady Stanton による女性の独立宣言に倣った、女性参政権運動を意識したものであることは、Maibor が“The novel opens with Christie’s echo of Elizabeth Cady Stanton” (113) と述べているように明白である。このまま家にいれば、ゆくゆくは地元の男と結婚して、おしゃれに関する話題などしかない退屈な生活を送ることになると予測する Christie が、自力で生計を立てて暮らしていくことに並々ならぬ決意と期待を抱いている様子が、この大仰な「独立宣言」という言葉に現れている。*Work* はこの一種の独立宣言、自立することを宣言した Christie が仕事遍歴の末に、女性のために社会的貢献をすることを自分の天職と見出すまでが描かれているが、そこには仕事とはかくあるべしという Alcott 自身の仕事についての信念が映し出されている。

Work における仕事にはふたつの側面がある。ひとつは報酬を得る手段としての面であり、もうひとつは精神的な満足感を得られるものという面である。Lynn Alexander が“the first half covering Christie’s trials as she experiments with a variety of jobs, and the second half focusing on her quest for a philosophical and spiritual purpose in life”(603)と述べているように、*Work* の前半は Christie の多様な仕事の経験に比重が置かれ、後半は仕事を通じて

人生における目的を探す彼女の姿が重視されている。前半は、Christie と社会という外部との関わりに焦点が当てられ、仕事の第一の価値は報酬を得ることである。後半は、Christie の内面に焦点が移っており、仕事の第一の価値は、それによって生きがいややりがいを得られることになっている。

前半部分の「仕事」の主たる目的は報酬を得ることであり、「仕事」は衣食住の獲得を保障するための手段である。叔父の家を出た Christie が職に就かなければならないのは、何よりも経済的な必要性に迫られてである。ひとりで生計を立てるために、Christie は意に染まぬ仕事であっても従事しなければならない。Christie の「仕事」は、雇い主が払う報酬と引き換えに提供されるものなのである。労働と対価との交換についての言及がされている場面もある。女中の面接の際には、雇い主が Christie に“I pay two dollars and a half” (Work 19) と具体的に報酬の話をしている。また、家庭教師として採用される面接の際には雇い主から希望の報酬を尋ねられる場面があり、Christie は“hesitatingly named a sum which seemed reasonable to her” (Work 49-50) と、ためらいながらも自らの労働の価値を査定している。Christie の「仕事」は他者によっても自分によっても、金額という数字で換算できるものなのである。自分が提供する「仕事」に見合うだけの報酬が得られるのかどうか、あるいは妥協できるかどうかを判断して Christie は仕事に就くことになる。

Work の前半には、このように労働と引き換えに獲得した報酬の使い道についても、具体的に触れられている場面がある。報酬は他者に与えることによって Christie が満足感を得る手段ともなりうるのだが、ここで目につくのは、報酬の分配についての細かい描写である。話し相手の仕事を辞めたときに多額の報酬をもらった Christie は、他者に気前よく金銭を分配している。Christie はまず、都会に出てきたときにももらった支度金を返そうとして叔父の Enos に 100 ドルを送り、“infinite satisfaction” (Work 101) を覚える。そして、奴隷として売られた家族を取り戻そうとしている、かつての女中仲間である、黒人の Hepsey にも 100 ドルを贈ることによって心が温かくなるのを感じている (Work 101)。さらに、女優をしていたときの仲間である Lucy にも結婚祝いを贈った。そして残りは、“she prudently put it by for a rainy day” (Work

102) と貯金したことが記されている。

Work の前半では、金銭以外の価値が仕事にないわけではないが、一番重要なものは経済的価値である。女中の職に就いたときの Christie は、黒人女性の Hepsey との人種を超えた交流を経験した。また、女優業では舞台に立つことで一種の自己顕示欲が満たされるといふ喜びを味わい、家庭教師や話し相手の仕事に就いていたときにはいくらか家族の役に立っているという自覚があり、お針子をしたときですら、Rachel との友情が得られた。このように、いずれの仕事でも金銭以外の付加価値、副産物がある程度あったことは間違いない。それらの経験が Christie に精神的な成長という恩恵ももたらしていることは確かであるが、基本的に Work の前半での Christie が働くという行為には、経済的必要性が大きなウエートを占めていた。経済的価値が一番になる仕事では、「独立宣言」をしたときに Christie が願った目標である“useful, happy woman” (Work 11) になることは達成されていない。一時的な高揚感や充実感は得られたとしても、経済的な利益を追求することが主だとすると、Christie は社会的に自分が useful であるとか、happy な状況であるとは感じていないからである。

Work の後半部分では、仕事によって精神的な充実を覚え、満足感を得られることに焦点が当てられている。前半の終わり、すなわちお針子の工房を辞めて Rachel に去られ、孤独感を味わいながらひとりで暮らしていた Christie からは、「仕事」における金銭の重要性が次第に失われていく。経済面での重要性よりも、内面の充足感の重要性にいつそう焦点が当てられるようになっていくのである。愛する人がいない人生を無意味に感じ、宗教にも救いを求められなくなった Christie は、“unable to...endure the hard struggle for the bare necessities of life when life has lost all that makes it beautiful” (Work 117) と、労働する意欲を失う。この頃の Christie はもっと条件のいい仕事を探しに行く気力すらなく、下宿に引きこもって低報酬の仕立物の内職をしているだけである。やがて病気になる、内職の仕事にも事欠くようになって困窮していく Christie だが、そもそも彼女がそこまで落ちてしまった原因は、「仕事」に意味を見いだせなくなったことにあった。お針子の工房を辞めた時点ではまだ“she knew that there was fitter work for her somewhere” (Work 117) と、内職よりも条件のい

い仕事に就ける可能性が暗示されているからである。しかし、孤独に苛まれている Christie はかつてのように積極的に外へ出ていくことができない。この頃の Christie は“she suffered a sort of poverty which is more difficult to bear than actual want” (Work 115) と、物質的な欠乏よりも、精神的な欠乏を感じていることが記され、「仕事」の意味が少しずつ変化していくことを予測させる。

やがて、再び現れた Rachel によって救われた Christie が従事する、Wilkins 夫人の家や Sterling 家での「仕事」は、満足感や達成感が味わえる、生きがいとなりうるものとなっている。報酬を得ることは Christie にとってもはや第一の目的ではなく、仕事をしているときの心理状態が重要なものとなっている。Christie は Sterling 夫人宅で話し相手として働き、台所仕事などの家事労働をすることになるが、それ以前の女中や話し相手の仕事とは趣が異なっている。家事労働をする場合でも、Sterling 夫人の家での Christie の心は穏やかであり、仕事をすることによって自分が役に立っているという、自己実現の欲求を満たしている。Christie は“I feel as if I had been born again” (Work 194) と述べ、生まれ変わったかのように完全な満足感を覚えているのである。また、David から教えを受ける庭仕事についても“Much of this is fine work for women, and so healthy” (Work 194) と充実したものであることを語っている。そこには仕事から得られる金銭についての具体的な記述はない。

その後、David と結婚してから従事した従軍看護婦の仕事でも、Christie は働くことにやりがいを見出している。そもそも従軍看護婦は David とともに戦いたいという強い意志から志願したものであり、働くことに金銭的価値で換算される仕事という考えが入り込む余地はない。戦地で有能な働きぶりを見せ、まわりの人々からも高い評価を得た Christie は“I never discovered what an accomplished woman I was till I came here” (Work 298) と仕事の充実ぶりを口にする。ここでの仕事に対価との引き換えになされたものでないことは明らかである。従軍看護婦の仕事は David の戦死という悲劇を伴うことになるが、彼の遺した言葉、“Don't mourn, dear heart, but work; and by and by you will be comforted” (Work 315) は、その後の Christie の進む方向を暗示している。

未亡人となった Christie には、仕事によって得られる報酬を重視する描写がまったく見られない。Christie は David の遺志を継いで庭仕事に従事し、彼の年金も受け取っているが、幼い娘を抱えている彼女が裕福な暮らしができる状況でないことは確かである。しかし、最後のほうで久しぶりに再会した叔父から、そんな Christie が女手一つで娘を育てていくことを危惧する言葉を浴びせられても、彼女は“If I am taken from her, then my little girl must do as her mother did” (Work 326) と、平然と語っている。そして自分の望みは“Wounded soldiers, destitute children, ill-paid women” (Work 327) を助けることだと告げる。この Christie の希望は結果的に interpreter として、女性の社会的な地位向上のために役立とうという活動、彼女の天職へとつながっていく。Maibor がこの場面での Christie と叔父とのやり取りを評して、“money is not her measure of personal achievement” (121) と述べているように、後半での Christie は、もはや仕事における経済的な面を重視してはいない。

後半での「仕事」は、Work の前半で語られたものとは異なる、内面的な部分を重視するものへと変わっている。Joy Kasson は、“Work explores not just its heroine's discovery of a productive occupation, but the therapeutic value of work itself” (xxvii) と述べているが、仕事によって“therapeutic value”が得られる、すなわち精神的な安らぎを感じ、達成感を獲得できるという状態の色合いがより濃くなっているのは作品の後半においてである。前半では報酬を得る手段としてクローズアップされていた「仕事」が、後半では充足感や満足感を提供する存在となっているのである。充足感や満足感が得られ、女性の役に立つことに喜びを感じる天職を見出した Christie はこうして“useful, happy woman” (Work 11) となる目標を達成できたのである。

前半部分の「仕事」と後半部分の「仕事」の違いを考える場合、work と labor という言葉の意味についても注目する必要がある。「働くこと」を表す言葉として、Work においてはタイトルと同じ work が作品の初めから終わりまで頻繁に使われており、その数は 80 以上にのぼる。意味としてはやはり「働くこと」であっても、労働や苦役を表す labor という言葉もあるが、Work でこの言葉が使われている箇所は 16 箇所である。Alcott が work と labor というふたつの言葉を厳密に区別して使って

いると指摘することは危険であるが、workの大半が一般的な「働くこと」や「仕事」の意味で用いられているとは言っていないだろう。

一方、laborについては、Workの前半と後半とで微妙に意味合いが変化していることがうかがえる。一般的にlaborは、報酬を得ることのみを目的とした「単純作業」やひたすら体を使うだけの「骨の折れる作業」の意味を伴う「仕事」に用いられる。Workの前半でもlaborはひたすら否定的な意味を伴っていた。具体的にlaborが使われている場面を見てみると、Christieが家を出て自立しようと決めた場面では、“the possession of a brave and cheerful spirit, rich in self-knowledge, self-control, self-help”

(Work 12)を求めるChristieに、“long discipline of life and labor” (Work 12)が必要だったと記述されている。このlaborはまさしく「単純作業」や「骨の折れる作業」を必要とする「仕事」という、否定的な意味で使われていると言えよう。また、最初の仕事である「女中」を解雇されたChristieについての記述では、“she was sent away to learn another phase of woman’s life and labor” (Work 27)とされ、それまでの女中という仕事がlaborだったことが明確に語られている。また、この次にChristieが従事する仕事もlaborとなるであろうことが暗示されているのである。このように、Workの前半でChristieが経験する仕事は、workという言葉で呼ばれる場合があっても、実質的にはlaborである。それらの「仕事」は単なる経済的な手段としての活動にすぎず、Christieが目指した「自立」が、こうした「仕事」によって達成されることはない。laborはあくまでも否定的な意味を持っている。

しかし、Workの後半ではlaborが単に忌むべきもの、workよりも劣るものではなく、Christieが目標とした“useful, happy woman”になるための手段のひとつとして描かれている。laborが肯定的な性質を帯びるようになり、好ましい活動とは言えないとしても、目標を達成するための手段としては重要なものととらえられているのである。ChristieがSterling家で暮らすようになってからの場面で、laborは次のように描写されている。“This was what she needed...best of all, friends to live and labor” (Work 189), “She kept the little house in order, with Mrs. Sterling to direct and share the labor so pleasantly” (Work 189). Sterling家でのlaborはChristieにとってもはや苦役ではなく、楽しいもの、

充実感さえ与えてくれるものとして描かれているのである。このようにWorkの後半では、laborすらも、自立や自己実現のためには必要なもの、意味があるものとして語られている。つまり、laborも一般的なwork的な意味合いを帯びるようになっていのである。

laborがWorkの前半と後半で異なった働きをしている理由は、「仕事」の目的の違いにある。Workの前半では、Christieが現状の仕事に満足していないことが繰り返し語られる。「女中」はそもそも彼女にとって“‘I’ll put my pride in my pocket” (Work 17)とか、あるいは“‘It isn’t what I want, but it’s better than idleness” (Work 17)と語っているように、自分の自尊心を抑えて意に染まぬながらも従事しなければならなかったものである。「女優」はこのまま女優を続けている自分の10年後を予測したChristieが、“A fine actress perhaps, but how good a woman?” (Work 43)と、将来の人生を悲観的に述べている職である。当時の中産階級の女性にふさわしい職業、恥ずかしくない仕事とされた「家庭教師」、「話し相手」ですらもChristieが満足感を得られる仕事とはならなかった。奉公先の家庭の幸福とは言えない環境に影響され、結局、Christieは心身ともに疲労しきって辞めることになるからである。

一方、Workの後半においては、働いているChristieは心を平穏に保ち、自分の仕事に満足感ややりがいを持っているとして描かれている。それは従軍看護婦のように社会的貢献度が高く、困難を伴う仕事のみならず、Sterling家での家事や庭仕事といった家庭的、個人的で危険を伴わない平和な仕事に従事している場合も同様である。そして、Christieが目的としていた究極の「仕事」の形が最後の章に出現する。数々の職業遍歴を経て結婚や出産もしたのちにChristieが最終的にたどり着いた仕事、彼女が生きがいを見出した仕事は、中産階級と労働者階級という女性たちのinterpreterという仕事だった。女性の役に立つ仕事をするに、Christieは“Perhaps this is the task my life has been fitting me for...A great and noble one which I should be proud to accept and help accomplish if I can” (Work 334)と、誇りとやりがいを感じている。そしてChristieはやるべき仕事が多いことを喜びであると語り、“I owe all I can do, for in labor, and the efforts and experiences that grew out of it, I

have found independence, education, happiness, and religion” (Work 343) と述べている。ここでの labor は Work で最後に出てくる labor だが、Christie は labor を通じてさえも、自立心や幸福を見いだせるという境地にまで達しているのである。仕事をして生きていこうと決意した 21 歳の Christie の “I only ask for a chance to be a useful, happy woman”

(Work 11) という希望は、こうして 40 歳になったときに達成されたと言える。

labor の意味が変化したことに見られるように、Work の後半部分には、「仕事」というものが持つ意義に関する作家 Alcott の理想、すなわち自立心を備え、やりがいを見いだせる「仕事」をすることによって、人や社会の役に立つ、幸福な女性になることが望ましいという思想が反映されている。さらに、そうした仕事は、幸せな家庭生活を送るうえでの妨げにならず、仕事と家庭の両立が可能なものとなっている。また、Christie が最後に従事した仕事は多分にボランティア的なものであるが、仕事によって正当な報酬を受け取ることが作品全体としては否定されているわけではないと言っている。

Alcott は仕事における経済的なメリットを重視している。Work には Christie が報酬をどのように使ったかについての具体的な描写が出てくるが (Work 101-102)、このような金銭についての詳細な描写は、自分が得た報酬の種類と額について Alcott が日記に細かく記していることを思い起こさせる。具体的な仕事内容と報酬の額が初めて日記に現れているのは 1850 年、Alcott が 17 歳のときのもので、“My Earnings” と記された下に “Rival Painters¹ \$ 5.00 Sewing 10 School 50¹⁰” (Journals 64) と、報酬の内訳が記されている。この “My Earnings” はその後も日記に毎年のように記入されており、Alcott がどのような仕事からどの程度の報酬を得ていたかがわかる。Alcott にとっては報酬の額や、それによって自分がどんな経済状況にあるかを具体的に把握することが重要だったとかがえる。一家の借金を返したいと仕事に励んでいたからであろう。Little Women が刊行された翌年、1869 年 1 月の日記には、“Paid up all the debts, thank the Lord! ... and now I feel as if I could die in peace” (Journals 171) と記されており、それまでの借金が Alcott にとってどれほどの重荷だったかを物語っている。Christie が貯金していることについて描

写したように、Alcott 自身も 1869 年 8 月の日記に “Now I have \$1200 for a rainy day, and no debts. With that thought I can bear neuralgia gayly” (Journals 172) と記しており、万一に備えた貯金の必要性を感じていることがわかる。

しかし、「仕事」は Alcott にとって、経済的な理由以外の理由からも不可欠のものであった。それは、Kasson が “Alcott similarly viewed work as a moral undertaking of special importance for women. The work affirmed by Work brings not merely material but spiritual success” (xxix) と述べているように明確である。人は仕事によって、この “spiritual success” を達成できる、すなわち精神的に満たされた状態になれるということなのである。

また、Alcott にとって「仕事」の意義のひとつが「自立」であったことは間違いない。山口ヨシ子が「Alcott にとって、経済的自立を果すことは美德であった」(59) と述べているように、「自立」には経済的な意味が大きい。しかし、それだけではなく、Work では精神的な「自立」の重要性も語られている。それが最終的に Christie がたどり着いた状況、誇りとやりがいを感じることでできる「仕事」を持つことなのである。そうすれば labor すらも work になりうるということであろう。衣川清子は Alcott の名が知られるきっかけとなった作品、Hospital Sketches (1864) についての批評で、「作家というキャリアによって、彼女は自分と家族を養うという役割を果たしただけでなく、世の女性たちとその予備軍たる少女たちに力強い言葉で語りかけ、皆がそれぞれの仕事に取り組み、それぞれの幸福をめざそうではないかと呼びかける「仕事」にも乗り出したのであった」(123-4) と述べている。

Alcott は Work で、「仕事」の重要性を通じて「幸福をめざそう」(衣川 124) と訴えている。Work で追及された望ましい仕事は、幸福な家庭生活、すなわちラストシーンに集約された、理想的な家庭との両立が可能なものである。Work は、Christie と、これまでの仕事遍歴で彼女が関わってきた女性たちと娘の Ruth が手を重ね、“loving league of sisters” (Work 343) がつくられているという場面で終わる。ここには Kasson が “Alcott’s utopian vision at the end of Work” (xxiii) と述べているように、一種のユートピア的空間が描かれている。このユートピア、すなわち Christie にとっての理想的

な「家族」が女性だけで成り立っていることは注目に値する。しかし、それ以上に重要なのは、Christieが自らの天職と悟ったinterpreterの仕事が、この家庭生活を営むうえでの妨げとなっていないことである。仕事をすることによって家庭生活を犠牲にする可能性は描かれていない。まさしくChristieは仕事と幸福な家庭の両方を手にしているのである。

2. Alcottが作家を取り上げない理由

仕事について正面から取り組んだ作品であるのに、AlcottがWorkで「作家業」を取り上げなかったのは、作家の仕事がworkでありながらも、苦役を表す本来のlaborの意味も備えているからである。Alcottが理想とした作家という仕事は、経済面でのメリットをもたらすと同時に、書くという行為によって自らを表現する充実感や達成感もたらすもの、すなわちWorkの結末でChristieが携わっているようなworkであった。しかし、作家にはWorkの後半に使われていたような意味ではない、本来の意味のlabor的な要素もある。そのlaborは苦悩や苦役を味わわせるものであるゆえ、理想的なworkとは相容れないのである。

Alcottが「作家」を取り上げなかった理由について、Little Womenにおいて既に語られてしまったからという考え方もある。羽澄直子は「執筆するヒロインは、作者のもう一人の分身『若草物語』のジョー・マーチに投影されているので、重複を避けたのか。あるいは半自伝的小説だからこそ、現実の自分とは違う、別の生き方の可能性を模索したかったのであろうか」(226)と述べている。確かに、Alcottは作家という職業をLittle Womenの登場人物であるJo Marchを描くことによって語っている。そのため、Jo Marchよりも作者の分身的要素が弱いChristieには作家という職業をあえて経験させなかったという可能性もある。しかし、Workには女中のようにAlcottが短期間しか経験しなかった職業や、実際の労働には就かなかったものの、経験する可能性もあり得た職業も含めて、Alcottがそれまでの人生において何らかの形で接触したことのある職業の大半が描かれている。Workが「仕事」というものに真正面から取り組んだ作品であるにもかかわらず、Alcottにとっての生涯の職業である作家をわざわざ除外したことに

は意図的な思惑があったと考えられる。

作家という仕事がAlcottにとってどのような意味を持っていたかを探るためにLittle Womenを検討すると、Alcott自身が反映されていると言われる作家志望のJoにとって、「書くこと」はその報酬と同様に、自己達成感も重要であることがうかがえる。Joがはじめのうち書いていたのは扇情的な小説である。Joはわずかな稿料と引き換えにセンセーショナルな小説を書き、得た報酬が家計の足しになるという経済的な利点と、自分の作品が公になることによる、いくばくかの満足感という心理的な利点の、両方のメリットを得ていた。このころのJoはひとつの作品につき1ドルという原稿料で、“rubbish”(Little 238)と自分が呼ぶ作品を新聞に掲載してもらいながら、もう少し実入りのいい懸賞小説にも応募して賞金を獲得している。そして“began to feel herself a power in the house”(Little 269)と、執筆によって得られるお金で家族を喜ばせることによって、自らも満足感を得ている。ペンでお金を稼ぐこと、報酬自体が大きな喜びとなっていることは否定できない。

さらに、作品が新聞に掲載され始めたころ、Joが「書くこと」によって、達成感や満足感を得ることがわかる。書きたいという衝動に駆られると、Joは“she gave herself up to it with entire abandon, and led a blissful life...she sat safe and happy in an imaginary world”(Little 265-6)と、執筆するという行為そのものから得られる満足感を味わっている。また、Joは“rubbish”(Little 238)と認める作品を新聞のために書きながらも、本として出版してもらえるような作品もひそかに執筆し、“manuscript, which was one day to place the name of March upon the roll of fame”(Little 238)といつかは有名な作家になることを夢見ていた。報酬を得ることだけを重視するのではなく、作家としての名声を得ること、すなわち自己実現を重視する思いがJoにはあったのである。

しかし、Joにとって小説を書くことの意味、作家であることの意味は次第に報酬が目的となり、経済的なメリットの追及がより重要になっていく。Joは編集者に認めてもらう作品を書くため、新聞のスクランダラスな記事を漁って題材を探すようになる(Little 349)。そこには作家としての自分の理想の追求などなく、利益が優先となっている。書きたいものを書くのではなく、売れるものを書

くという方向のみに進んでいるのである。このように商業的な成功と引き換えに、作家としての自分を見失っていた Jo だが、のちに伴侶となるベア教授に “They haf no right to put poison in the sugarplum, and let the small ones it” (*Little* 355) と、自分の作品が子供に害を与えるものであることを指摘され、「作家」としての方向性を変える。そして今度は少女向けの小説を書くようになり、やがてその小説が評価され、Jo は名声と金銭をともに獲得することになる。作家という仕事から Jo は自己実現という精神的な恩恵と、裕福になるという経済的な恩恵の両方を受けることになったのである。

Alcott は最初のころの Jo と同様に、大衆受けするような作品を安い原稿料で次々と執筆して家計を支えていたので、作家業は字義通りの意味の labor だった。作家業は、Madeleine Stern が “Alcott wrote for two principal reasons: writing was a catharsis for her, and writing could be traded for money” (20) と、Alcott にとって書くことの理由のふたつ目としてあげているように、金銭と引き換えにできるものであった。また、Showalter は “Alcott found the economic stimulus to be the strongest motive for her urge to write professionally” (*Sisters* 47) と、Alcott には経済的な要因が執筆と切り離せないものであることを述べている。1859 年の日記に Alcott が “Some day I’ll do my best, and get well paid for it” (*Journals* 94) と書いていたように、多額の報酬をもらえるかもしれないという可能性は執筆の動機として大きなものだったのである。

Little Women の刊行まで、作家という職業は Alcott にとって実質的には扇情的な小説、三文小説を書いて、安価な原稿料をもらうだけの手段にすぎなかった。それは報酬を得るためのひとつの方法に位置づけられる、生計を立てるための他の職業、家庭教師や女中などと同様の labor だった。つまり、作家業も賃金報酬を得るという点では、Alcott が経験した他の仕事と変わらなかったのである。

しかしながら、Alcott 自身が反映された Jo についての描写からもわかるように、作家という職業は彼女にとって生きがいや慰め、野心を達成するための手段をも意味した。Alcott は日記でも「有名になりたい」という願望を吐露している。1857 年、24 歳のときには Charlotte Bronte の伝記を読ん

で、自分が Bronte のように有名になったらどうかと想像力を働かせている (*Journals* 85)。また、当時に高尚とされていた雑誌、*Atlantic Monthly* に作品を載せてもらいたいという野心もあった。1858 年、Alcott が 25 歳のときの日記には “I hope I shall yet do my great book, for that seems to be my work, and I am growing up to it. I even think of trying the “Atlantic”” (*Journals* 92) と記されている。*Atlantic Monthly* は 1857 年に創設されているから、Alcott がこの日記を書いた当時は新進の憧れの雑誌だったのである。Alcott が三流の物書きから脱して、文学的により高尚なものを書きたいと思っていたことがうかがえる。

Alcott にとっての書くことの意味は *Little Women* の成功によって大きく変貌し、作家業は富と名声の両方をもたらすものとなる。わずかな報酬を得るために書いていた Alcott だったが、多額の印税をもたらす、社会的な地位も与えてくれるものとなった作家業は、もはや家庭教師や女中と同等に位置づけられるものではなくなった。作家業はかつての Alcott が目指していた「有名になりたい」という願望をかなえてくれる手段となったのである。有名になるにしたがって原稿料も上がり、たとえば 1872 年の日記にはかつて 2000 ドルの原稿料で執筆を依頼された連載小説を断ったところ、今度は 3000 ドルでどうかと頼まれたので引き受けたという記述がある (*Journals* 183)。「作家業」は経済的な性質、Alcott が置かれた社会的な地位から見れば、もはや苦役を示す labor ではなく、クリエイティブな work になったと言っていいだろう。

しかし、作家として有名になり、経済的にも不安がなくなってしまうと、「作家業」は Alcott にとって否定的な側面も持つものになる。Stern が “Writing was already a catharsis for her and would continue to be so, especially when she composed her anonymous and pseudonymous thrillers. Only later after much success would it become a burden” (18) と述べているように、初めは Alcott にとって書くことの理由のひとつはカタルシスであったが、*Little Women* 以降、作家として成功したあとはそれが「苦役」に変わっていくのである。Work を刊行した当時、健康に支障が出ていた Alcott にしてみれば、書くこと、作家であることはもはや単なる感情の捌け口や野心の対象ではなく、苦行の一種だった

と考えられる。名声は喜びよりも苦痛を与えるものとなったことは、1875年の日記に“Fame is an expensive luxury. I can do without it” (*Journals* 196) と書かれていることから読み取れる。経済的な性質としては labor でなく、work になったはずの「作家業」だが、心理的には苦しみを味わわせる、本来の labor の側面を持つこととなったのである。

作家業は、Alcott に幸福な家庭生活を楽しむゆとりを与えないものでもあった。作家という仕事は Alcott が成功するまでも、そして成功したあとも、彼女から時間も健康も奪うものだったからである。*Little Women* で成功してからも Alcott が猛烈な勢いで執筆し、仕事に時間を費やしていたことは、彼女の 1873 年 4 月の日記の “I spent seven months in Boston, wrote a book and ten tales, earned \$3,250 by my pen” (*Journals* 188) という記述からもうかがえる。仕事量の多さを考えると、個人的な生活を楽しむ余裕などなかったことは明らかである。1874 年 1 月の日記には、Alcott は “When I had the youth I had no money, now I have the money I have no time, and when I get the time, if ever do, I shall have no health to enjoy life” (*Journals* 191) と書いており、このあとでは自分が義務感に縛られていると語っている (*Journals* 191)。多額の印税が入ったのちも、家族の諸費用を賄うために、Alcott は健康を害した体に鞭打ってひたすら書き続けているのである。

世間的には成功したと見なされてからも、Alcott は作家としての自分に満足していなかったと考えられる。Showalter は “she never felt pride in her work” (*Alternative* xxiii) と Alcott が自分の職業に誇りを持ってなかったと断言し、さらに “The demands of her readers for more books like *Little Women* tied her to a particular domestic style she found maddeningly restrictive, while her family’s constant needs kept her at the grindstone of literary production” (*Alternative* xxiii) と述べている。Alcott が本当に書きたかったものを書いていなかった、すなわち作家としての理想の姿に自分になっていないと感じていたことは、*Little Women* の続編の *Jo’s Boys* で、Jo が自分のことを評して “only a literary nursery-maid who provides moral pap for the young” (*Jo’s* 23) と皮肉を言う箇所からもうかがえる。この Jo のように、Alcott も若者向けに道徳的な作品を描き続ける自分を複雑な思いで眺めていたのではないだろうか。

1878 年に Alcott が Miss Churchill² という女性に宛てた手紙では、作家として成功することの厳しさを説き、*Little Women* が自分の予想に反して売れた経緯を語ったあとで、 “since then, though I do not enjoy writing “moral tales” for the young, I do it because it pays well” (*Letters* 232) と述べている。良い報酬を得られるから書いてはいるが、執筆を楽しむことはできないという Alcott の本音がうかがえる。現実には、*Little Women* 以降の Alcott は「児童文学作家」「家庭小説作家」というレッテルを貼られてしまい、世間が作り上げたイメージに従って作品を書き続けることになる。Alcott にとって作家という仕事は、世間からの要望や経済的必要に迫られて、自分の意志に反する作品を書かなければならない、苦役である labor だったのである。

3. *Work* の結末と Alcott の理想との矛盾

このように、Alcott にとって、「作家業」は金銭的な成功をもたらしながらも、精神面での充足感を十分に与えているとはいえない、理想の職業としては失敗であるという二面性、複雑性を備えている。Alcott にとって生きがいであり、自己実現が可能なはずの仕事でありながら、それとは相容れない要素も備えた仕事だったのである。

Alcott が理想の仕事として *Work* の結末で描いた、Christie が自分にとっての天職であると思出した interpreter という仕事が一種のボランティア的なもので、対価と引き換えになりうるものでないところにも、「作家業」が理想の仕事となり得ない理由が表れている。Christie は interpreter になることによって、 “I only ask for a chance to be a useful, happy woman” (*Work* 11) という目的を達成した。しかし、この仕事はシングルマザーである Christie が生計を立てる手段にはなり得ない。確かに、Christie は園芸の仕事をしているし、夫の年金も受け取っているが、彼女に安定した経済的基盤を保証することになったのは、結局のところ、叔父から遺された財産だった。最終章で interpreter の天職を発見する Christie に、安心して社会的な活動に奉仕するための保証を与えるかのように、その直前で Christie が叔父と再会するという場面を Alcott は描いている (*Work* 323-8)。ある日突然、会いたいから来てくれという叔父からの手紙が Christie に届いて、彼のもとを訪れることになるという設

定はいささか強引である。ここで Alcott が Christie と叔父を引き合わせたのは、Christie が金銭的な問題に頭を悩まさず、女性のために働くという理想を追求するようにするための伏線であると考えられる。それによって自己実現が達成されるからである。しかし、Christie の interpreter とは異なり、ここまで見てきたように「作家業」は Alcott にとっては金銭的な面を抜きにしては考えられない仕事だったのである。

叔父が支配する家庭という家父長制社会から出ていった Christie だが、彼女の“loving league of sisters” (Work 343) は最終的に、男性の労働によって得られた経済的な利益を享受することによって成り立つことになる。最後まで自分のペンによって生計を立てており、男性である父親の Bronson を支え続けた Alcott とは対照的である。理想を追求あまり、経済的には家族に苦勞をかけ続けた Bronson を Alcott は敬愛しつつも、ときにはいらだちを見せないわけではなかった。家父長として家族を養うことが難しかった Bronson から得られなかった、経済的な安定感、理想の仕事のみを追求する環境を Alcott は Christie の結末に投射していると思われる。

Alcott は Christie のように遺産を受け取るといった他者からの支援に頼ることなく、自らの力、すなわち「作家業」という仕事に終生にわたって従事するほかなかった。意に染まぬ作品でも書き続けなければならなかった Alcott にとって、経済的な問題を超越した「仕事」ができること、精神的な充足感のみを追求することへの願望が、Work の結末に表れていると考えられる。先にも述べたように、Little Women で成功するまでの Alcott にとって作家という仕事は、対価と引き換えに三文小説を量産しなければならぬ手段であり、そこには彼女が自身の書きたいものを書くという理想を追求する余裕はなかった。ようやく成功して経済的には心配がいらなくなったあとも、Alcott が執筆し続けた作品は自分の意に染まぬ少女小説で、彼女は世間の要望に応じて創作し続けなければならなかった。つまり、Alcott は「作家業」によって、Christie のように幸福を実感できる結末を迎えることにはならなかったのである。経済的な苦勞や他者の要望から解放されることがなく、自分の理想だけを追って執筆するのは不可能だった Alcott は“useful, happy woman” (Work 11) にはなれなかった。

このように作家業には、Alcott にとって、Little Women での成功という富と名声をもたらした work としての面があると同時に、成功するまでの一種の賃金報酬を得るための手段だった labor や、成功後も意に染まぬ作品を書かねばならなかったことによる labor としての面がある。この「仕事」として、labor と work というアンビヴァレントな要素があることが、Alcott にとって作家という仕事を複雑なものとしている。Work で「作家業」を描こうとすれば、作品の前半の職業である女中や家庭教師といった、賃金報酬を得るための仕事、すなわち本来の labor の区分に入れることはできないし、後半で用いられた、意味合いの変化した labor の区分に入れることもできない。なぜならば「作家業」は、Work の前半と後半に現れる職業の両方の面を備えているからである。また、クリエイティブな要素や世間的な成功というプラス面だけに着目して、「作家業」が Alcott の理想の work であると言い切ってしまうこともできないのである。

以上のように、Alcott が「作家業」を Work で取り上げなかった理由は、さまざまな矛盾や複雑性ゆえに、作家という仕事は理想を与えてくれる仕事のように思われるが、そこに位置づけることは不可能だったからである。結局、Work における「仕事」の意義は「自立」を達成すること、そして“useful, happy woman” (Work 11) になることである。Christie は女性のために尽くすという仕事によって「仕事」の意義を見いだすことができた描かれているが、作者である、「作家業」に一生を捧げた Alcott は“useful, happy woman” (Work 11) になれなかったと言えるだろう。「仕事」というテーマに真っ向から取り組んだ Work は、Alcott にとっての「作家」という仕事の意味、書くこととはいかなるものだったのかを読み解くうえでも重要な作品であると結論づけられる。

注

1) *Rival Painters* は *The Rival Painters A Tale of Rome* のことで、オルコットにとって初めて新聞に掲載された短編である。1852年、ボストンの新聞「Olive Branch」に匿名で掲載された。Eiselein, Gregory, and Anne K. Phillips, ed. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Westport: Greenwood Press, 2001. pp. 286-7.

2) オルコットはこのミス・チャーチルに宛てた別の手紙で、いくつかの出版社の名を挙げて、原稿料をどれくらい払ってくれそうかと具体的な数字を伝えている。(Letters 233)

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「大学院生研究助成(B)」(DB2711)の助成を受けたものである。

謝辞

執筆にあたって多大なるご指導・ご支援を賜った指導教員の時實早苗先生に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- [1]Alcott, Louisa May. "Behind a Mask" 1866. *Alternative Alcott* 95-202. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1988. Print.
- [2]---. "Happy Women" 1868. *Alternative Alcott* 203-06. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1988. Print.
- [3]---. "Hospital Sketches" 1863. *Alternative Alcott* 1-73. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1988. Print.
- [4]---. "How I Went Out to Service." 1874. *Alternative Alcott* 350-63. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP., 1988. Print.
- [5]---. *Jo's Boys*. 1886. Digireads.com Publishing, 2007. Print.
- [6]---. *The Journals of Louisa May Alcott*. Joel Myerson, Daniel Shealy, and Madeleine B. Stern, eds. Boston: Little, Brown and Company, 1989. Print.
- [7]---. *Little Women*. 1868-1869. New York: Penguin Books, 1989. Print.
- [8]---. *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Joel Myerson Daniel Shealy, eds. Boston: Little, Brown and Company, 1987. Print.
- [9]---. *Work: A Story of Experience*. 1873. Ed. Joy S. Kasson. New York: Penguin Books, 1994. Print.
- [10]Alexander, Lynn M. "Unsexed by Labor: Middle-Class Women and the Need to Work." *American Transcendental Quarterly* 22.4 (2008): 593-608. Print.
- [11]Dawson, Janis. "Little Women Out to Work: Women and the Marketplace in Louisa May Alcott's Little Women and Work." *Children's Literature in Education: An International Quarterly* 34.2 (2003): 111-30. Print.
- [12]Kasson, Joy S. "Introduction" to Alcott, *Work: A Story of Experience*. New York: Penguin Books, 1994. Print.
- [13]Maibor, Carolyn R. *Labor Pains: Emerson, Hawthorne, and Alcott on Work and the Woman Question*. Ed. William E. Cain. New York: Routledge, 2004. Print.
- [14]Showalter, Elaine. Introduction. *Alternative Alcott*. By Louisa May Alcott. Ed. Elaine Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1988. Print.
- [15]---. *Sister's Choice: Tradition and Change in American Women's Writing*. New York: Oxford UP, 1991. Print.
- [16]Stern, Madeleine B. *Introduction. the Journals of Louisa may Alcott*. Ed. Joel Myerson Daniel Shealy. Boston: Little Brown and Company, 1989. Print.
- [17]Yellin, Jean Fagan. "From Success to Experience: Louisa may Alcott's Work." *Massachusetts Review: A Quarterly of Literature, the Arts and Public Affairs* 21.3 (1980): 527-39. Print.
- [18]羽澄直子「意義ある労働を求めて—ルイザ・メイ・オルコット『仕事』」「『アメリカ文学にみる女性と仕事—ハウスキーパーからワーキングガールまで』」217-34. Ed. 野口啓子・山口ヨシ子編著 彩流社 2006年. 217-34.
- [19]衣川清子「ルイザ・メイ・オルコット『病院スケッチ』と「ハッピー・ウィメン」における仕

事の意義』『埼玉女子短期大学研究紀要』16 (2005): 115-24.

[20]山口ヨシ子「女の職業としての詐欺師 —オルコット『仮面の陰で』『v・v』など」『人文研究：神奈川大学人文学会誌』150 (2003): 47-88.

Abstract

Although Louisa May Alcott is known as a writer of the juvenile and domestic fiction, she also wrote for adults and posed some social problems. One of those social novels *Work: A Story of Experience* (1873) describes the worthiness of work through the various working experiences of Alcott's herself. However, writing as profession is not taken up as one of the jobs in *Work* even though it was the primary means of earning a living for Alcott. This paper attempts to analyze the significant absence of the writing in *Work* by focusing on the complex nature of the profession as a work for Alcott. I will discuss that although the images of work as ideal human activity are presented in the novel, the complexity of profession prevents it from being positioned as ideal work.

(受付日：2016年10月8日，受理日：2016年11月21日)

杉山 眞弓 (すぎやま まゆみ)

現職：大妻女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程二年

千葉大学大学院人文社会科学部総合文化研究専攻博士前期課程修了。

専門はアメリカ文学。現在は19世紀後半のアメリカの女性作家の文学における、女性にとっての仕事の概念について研究を行っている。

主な論文：杉山眞弓，大山中勝。(2014)。「自称詞と対称詞，および他称詞に関する一試論—英米小説を資料として」。『言語文化論叢』8, 49-67. 千葉大学言語教育センター。